

「中国語図書分類検索」の作成作業に携わって

新谷 扶美子

平成21年の4月から10月及び、23年の4月から24年3月にかけて、国立国会図書館の実務研修員として、財団法人東洋文庫図書部に在籍させていただいた。その間に、文庫所蔵の現代中国語図書を分類しなおす、という仕事に携わった。これは、現代中国語図書をオンラインで分類検索する、「中国語図書分類検索」を立ち上げるための作業であった。本稿では、新たな分類の作成までの道筋と、筆者が担当した作業の中で特に印象に残っていることとを、やや雑駁ではあるが思いつくまま記してみようと思う。

1. 東洋文庫所蔵現代中国語図書の概要

東洋文庫のそもそもの始まりが、中華民国大総統顧問であったジョージ・アーネスト・モリソンの収集資料であることからもうかがい知れることだが、中国研究とりわけ中国史研究は、アジア全般を網羅する東洋学専門研究機関である東洋文庫の中でも、ひととき重視されてきた研究のひとつであった。そのための資料収集にも力が注がれたことは、例えば後述する旧近代中国研究委員会の、「近代史の資料は、いわば無限に存在すると言えるのであって、それらをできる限り網羅的に収集する方針を採った」⁽¹⁾という姿勢からも知ることができる。平成24年2月に刊行された『東洋文庫年報』(2010年版)によると、平成22年度末現在、東洋文庫は、約97万冊の資料を所蔵している⁽²⁾。現在はもう少し増えていると思われるが、そのうち約6万冊を現代中国語資料が占めている⁽³⁾。主題の時代順に並べると、①1840年以前の中国を主題とする文献(図書部収集)、②アヘン戦争(1840年)以降の近代中国関連文献(1954～2002年度研究部旧近代中国研究委員会収集、2003年度～図書部収集)、③1950年以降の現代中国関連文献(2003年度～超域アジア研究部門現代中国研究班収集；2007年度～人間文化研究機構(NIHU)の研

究拠点のひとつである現代中国研究資料室でも収集)となる。またそれとは別に、榎文庫など個人受贈コレクション内にも、現代中国語資料が散見される。

2. 旧近代中国研究委員会の「中文書籍分類表」

1954年、東洋文庫に旧近代中国研究委員会が組織されるまでは、受贈コレクション以外の現代中国語資料は、漢籍の四部分類にもとづいて整理・分類されてきた。旧近代中国研究委員会はその発足にあたって、「日本における近代中国研究の発展には、広く一般の研究者に研究上の便宜を供することが緊要であると考え、資料の収集と公開、各種の目録や索引など工具書の編集・刊行を事業の柱にし」⁽⁴⁾た。ところが、「これらの資料はいわゆる新書であって、東洋文庫が採ってきた漢籍の整理・分類方法は適」⁽⁵⁾さなかった。そこで、委員会の方針として、当委員会収集資料を、日本十進分類法（以下 NDC）に依拠した新しい分類法「中文書籍分類表」によって分類することとした。NDC とこの分類との差異は、①日本ではなく中国を主体として構成されている点、②工業部門を工学・技術と産業に振り分けている点にあり、これは次に述べる「東洋文庫中国図書分類表」にも引き継がれている。

3. 「東洋文庫中国図書分類表」作成経緯

上記のとおり、旧近代中国研究委員会においては NDC に依拠した分類が始まった一方、図書部においては依然として、現代中国語資料の四部分類による分類・整理が続けられてきた。その結果、所蔵資料を俯瞰的にみるための「分類」というよりも、番号を手掛かりに資料を探し出すための「請求記号」としての色合いばかりが強くなってしまった。

そこで、2002年9月図書部長に就任した田仲一成氏の指揮下、図書部においても現代中国語資料の、四部分類から近代的な分類への脱皮が始まった。まず一番肝要なのは新たな分類をどのようにするかである。すでに旧近代中国研究委員会の「中文書籍分類表」が存在していたが、1840年以降の中国史を研究・収集対象とする委員会の性格から、対象から外れる1840年以前の前近代史は「近代以前」でひとくくりになってい

た。また、同じく主な収集対象から外れる自然科学や語学、文学なども、大まかな分類が付されているのみであった。そこで、図書部資料整理課目録系の篠崎陽子氏により、NDC 及び「中文書籍分類表」に基づきつつ中国や台湾の分類法⁽⁶⁾も参考にして項目の取捨選択をした、図書部独自の「東洋文庫中国図書分類表」(以下、TDC)が作成された。以下に挙げる2か所は、「中文書籍分類表」と比較して、特にTDCの特徴が表れていると筆者が考える部分である。

(1) 歴史

「中文書籍分類表」との大きな差異のひとつに、TDCが「考古学」を分類項目として挙げていることがある。「中文書籍分類表」は、前述のとおり近代を主題とする資料群のために作られた分類表であるため、「考古学」という分類項目は設定されていない。しかし、前近代史において考古学は重要な分野のひとつである。そこで、TDCでは「中国図書館分類法」のK85「文物考古」⁽⁷⁾を流用してC280「文物考古(考古学)」という項目が作られている。中国の文物に関する考古学はC282「中国文物考古(総論)」の下位に並んでいるのだが、なかでもC282.1「敦煌学」を採用したことは、敦煌関連資料も多く所蔵する⁽⁸⁾東洋文庫の特徴を表しているものと言える。また、出土文物については、例えばC282.91「遺物」>C282.911「石器」、C282.912「銅器」、C282.913「銅鏡」、C282.914「陶、瓷、磚瓦」、C282.915「其他の遺物」といった具合に、必要に応じて細分してある。そのほか「遺跡」「出土文字資料」についても同様である。なお、「出土文字資料」の「金石文」については、当初下位分類項目が「金文」「石鼓文」「碑碣」「石経」「経幢」「墓誌」「其他の石刻」となっていた。しかし、後日ひとつとおりこの分野の分類入力作業を終えたところで、所蔵の状況から見てここまで細かい必要はなく、逆に細かくすることで石刻文については全体が把握しづらくなっていることがわかった。そこで篠崎氏と検討し、「石鼓文」以下を「石刻」としてひとまとめにした。

(2) 語学

もうひとつとしては、語学において、少数民族言語の分類項目が細かく設定されていることを挙げておきたい。「中文書籍分類表」においては少数民族言語に関する項目は設けられていなかったが、図書部収集資料には多種多様な少数民族言語に関する資料が含まれていることから、これも「中国图书馆分类法」のH2「中国少数民族语言」⁽⁹⁾を流用・取捨選択し、C819.1「少数民族古語」、C819.21「蒙古語」、C819.22「藏語」、C819.23「維吾爾語」等10項目に細分した⁽¹⁰⁾。これによって、出版時期の違いで呼称・表記の異なる言語や、その言語から派生した方言などを含む検索が容易になった。

4. 入力作業及び検索結果表示

上述の経過を経て、TDC はひとまずその形を整えた。次はいよいよ、筆者が担当した、分類検索を可能にするための分類付与・入力作業である。すでに、旧近代中国研究委員会の研究を引き継いだ近代中国研究班が、「中文書籍分類表」に基づいてある程度の入力を行っていた（TDC の分類番号は「中文書籍分類表」とほぼ共通のものである）で、重複する分野についてはもちろん、それ以外の分野でも、判断基準等参考にさせていただいた。途中、書誌入力のされていないもの、同一書誌の別個体にそれぞれ書誌を作ってしまったものなど、別途作業が必要となるものもあったが、そのたびに、篠崎氏を通して非常勤職員の方々に追加の作業をお願いした。他の作業もある中、快く引き受けてくださった非常勤職員各位に、この場を借りてお礼を申し上げたい。

追加の作業と言えば、主に経部の經典類について、漢籍として「漢籍総合データベース」に入れるべきものと、現代中国語資料として扱うべきものとの区分けに悩んだことを思い出す。近代以降に刊行されたものでも、ただ単に昔の資料を活字に起こしただけのものは、文庫では漢籍として扱う。近代に入ってから付された注が含まれるものは、現代中国語資料である。困るのは、注が文字の異同を記すにとどまるような資料で、「歴代の注釈者の注を比較検討して、振り直した」等の記載があるものだ。著者の創意がどのあたりに出ているのか、どちらのデータベ-

スに入れるのが妥当か、思い切って1件を振り分けても、似たような主旨の資料は多く、前回のものと比べてこれはどうか、これは、と考えるのは悩み、迷い、の繰り返しであった。

この分類付与作業を通して問題になったのが、そのものずばりの分類項目はないが、といて個別に項目を立てるほどでもない、というような資料の分類である。というのは、「中文書籍分類表」もそうであるがTDCにおいても、先に分類ありきではなく、先に所蔵資料があり、所蔵状況に則して分類を構成したという事実がある。そのため、所蔵の少ない部分はNDC等のような細分を行っていない。「その他」に当たる項目がある場合はそちらに振るが、ない場合はその内容を含む上位項目に含める。結果、場所によっては検索画面である項目をクリックすると、そこが本来の居場所である、下位項目全体にわたる内容の資料よりも、こまごまとした資料ばかりが目につくという状況になってしまった。収集分野がある程度限定されている旧近代中国研究委員会収集資料では、大きな問題にはならなかったのだが、収集分野が多岐にわたる図書部収集分を入力し始めたことで、この問題が目につくようになってきた。そこで、これも篠崎氏と相談の上、改めてNDCや「中国図書館分類法」等を参考に、単独で分類項目を立てるべきものは立て、その一方で、数件しかなく新たに項目を立てるには及ばないものについては「其他」という項目を増設してここに分類することとした。

また、この問題を考えていく過程で、検索結果の見せ方についても検討が重ねられた。公開当初は（今現在もそうであるが）、分類番号が完全に一致するものについてだけ表示をさせていた。例えば、C210.7「民国（1912—1949年）」をクリックしても、C210.71の分類を持つ「辛亥革命」は出てこない。至極当然なことではあるが、民国に関する資料がどのくらいあるのか、といった所蔵資料の全体像を掴むには、その範囲の項目をひとつひとつクリックしていかねばならない。分類を細かくすればするほど、一覧できる情報も細切れになってしまう。しかし、そうかといって大きくりにすると、分類を振り直すことによる利点が失わ

れてしまう。試行錯誤のなかで、一時は分類番号の前方一致によってヒットさせるという方法も実行に移された。分類自体を大きくくりにはしないで済み、かつ上位分類をクリックすれば全体像がつかめるわけである。一見よい方法のようにも思われたが、しかしこの方法を採用すると、大項目をクリックしたときに数千件、分野によっては数万件の書誌がずらっと並ぶことになる。やはりこれでは分類検索の意味をなしているとは言えず、検討の後に完全一致に戻した。

5. まとめ

以上、ご紹介してきたようにあれこれ検討を重ねつつ、2010年6月に「中国語図書分類検索【暫定版】」がオンラインで公開された。これに先立って2007年4月に公開されていた「中国語図書の検索」は、書名、各巻内容書名、叢書名、著編者名、出版地、出版者、出版年を検索対象とし、簡体字（書名及び著編者名はピンインでも検索可能）で検索窓に入力したキーワードによって検索を行う。冊子体目録で探すのに比べれば随分楽になったのではあるが、必要な資料の書誌事項に必ずしもキーワードが含まれているわけではなく、やはり限界があった。「中国語図書分類検索【暫定版】」はこの欠点を補うものであり、これにより利用者各々の検索における手間を少しでも減らすことができれば、作業者の一員として嬉しく思う。

なにはさておき、所蔵資料に分類を振りなおすという大掛かりな作業に、実務研修員の自分に関わることができたのも、ひとえに東洋文庫図書部の皆様のご厚意によるものであり、心よりお礼を申し上げたい。特に篠崎氏には、あれこれとご相談を持ちかけたり、時には研究部との橋渡し役をお願いしたりもした。お仕事の邪魔をしてしまったことも少なからずあったと思うが、いつでも快く応じてくださり、本当に感謝してもしきれないほどである。【暫定版】の名が示すとおり、まだ所蔵する現代中国語図書全てを網羅できていないわけではない。しかし、「中国語図書分類検索」は、理想の形に向かって今も一步一步着実な歩みを進めている。その制作過程に関われたことを誇らしく思いつつ、その動向に今後も注目していきたい。

注

- (1) 本庄比佐子「近代中国研究と東洋文庫〔平成16年度秋期東洋学講座講演要旨（世界のアジア学と東洋文庫）〕」『東洋学報』86巻4号（2005.3）p.80（東京：東洋文庫, 1911-）
- (2) 『東洋文庫年報』2010年版（東京：東洋文庫, 2012.2）p.5
- (3) 東洋文庫HPの、現代中国語図書キーワード検索 OPAC である「中国語図書の検索」で0検索をすると、平成25年1月10日時点で58,261件ヒットする。
- (4) 『近代中国関係図書分類目録：東洋文庫所蔵. 中国文2』（東京：東洋文庫, 1992.3.）はしがき
- (5) 同上
- (6) 『中国図書館分類法』第4版（北京：北京図書館出版社, 1999.）, 同第5版（北京：国家図書館出版社, 2010.9.）, 『中文圖書分類法』2007年版（臺北：國家圖書館, 2007.12.）
- (7) 『中国図書館分類法』第5版（北京：国家図書館出版社, 2010.9.）pp.230-232
- (8) 東洋文庫HP（<http://www.toyo-bunko.or.jp/library3/shozou/>）によると、「世界各地に所蔵されている敦煌文書（大英図書館所蔵のスタイルン将来文書、パリ国立図書館所蔵のペリオ将来文書、中国北京図書館所蔵写経、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支所所蔵文書等）のマイクロ・フィルムが収集されており…」とある。
- (9) 『中国図書館分類法』第5版（北京：国家図書館出版社, 2010.9.）pp.159-160
- (10) C819.の後が「少数民族古語」のみ1であるのは、その下位にC819.11「匈奴語」、C819.12「鮮卑語」など8つの項目を設定しているためである。

(国立国会図書館参事)